鳥取の民話

16

収録・解説　酒井董美（ただよし）

語り手　大原寿美子さん（明治40年生まれ）
昭和54年10月7日収録

骸骨になって仇討ち

踊る骸骨

（八頭郡智頭町波多）

あらすじ

昔。下（しも）の七兵衛と上（かみ）の七兵衛が仲良しで、町の方へ出かせぎに行った。

上の七兵衛は遊んでばかりで、下の七兵衛は一生懸命働いた。そして3年たった。上の七兵衛は「3年たったが銭は1銭もないし、着ていぬる着物もない」と言う。下の七兵衛は呉服屋で着物を買ってやり、連れだって帰ってきた。

村が見える峠で、上の七兵衛が謀反を起こし、下の七兵衛を後ろから、ばっさり斬り殺し、土産からお金から全部持ってもどった。しかし性根は変わりはしないので金は使い果たし、3年たって、山越ししなければならなくなった。

下の七兵衛を殺したウネまで来たら「上の七兵衛、ちょいと待て」と裾を押さえる者がある。それが下の七兵衛の声だからびっくりしていると、下の七兵衛の骸骨が残っていた。「3年前、ここでおめえがわしを殺えて荷物や金を持っていんでみな使うたかい」「何言うても、ほんに断りのしようもない。こらえてごしょえ」

「3年後、おまえと会おう会おうと思うて、毎日待っとった。銭がなけにゃあ2人で一もうけしよう。おめえはよう歌をうたうだけえうたえ。うらは踊るけえ」と下の七兵衛が言うから、「そがしょう」と2人が出たところが、町をあちこち回っていると、珍しいから、本当に、受けに受けたそうな。

そうしていたら、それが殿さんの耳へ入った。

2人は大きな殿さんの庭に呼ばれた。上の七兵衛が歌をうたいだした。そして骸骨に「さあ、踊れ」と踊らせるけれど、それまであれだけよく踊っていた骸骨がちっとも踊らぬ。「なして踊らんじゃあ」とびっしりたたいたら、骸骨なのでごとごとっと砕けてしまい、その骸骨は殿さんの前へ行って座った。「殿さんと会いとうてこたえなんだ。これまで踊ったのも殿さんに会うためじゃった」と言った。

「この上の七兵衛は3年前、こういうわけで峠から家が見え出いたウネのところでわしを殺いて、このようなことをしてきた。これで仇（かたき）討ちができる。今日の日が来たじゃ」と一部始終をすっかりみな話したら、殿さんが「上の七兵衛はたいへん悪者じゃ」と上の七兵衛を縛り上げて全部白状さした。骸骨が言う通り同じことだったので、上の七兵衛ははりつけにあった。下の七兵衛は仇討ちをしたのだそうな。

イラスト・福本隆男

解説

関敬吾『日本昔話大成』の話型では、本格昔話「継子」の項の中にある「唄い骸骨」がこれに当たる。鳥取の話では骸骨が踊りを踊る話になっているので、タイトルを「踊る骸骨」としたが、『日本昔話大成』の話型では歌をうたうことから「唄い骸骨」と命名されているのである。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。